



ご挨拶・祝辞



看護「三冠王」達成おめでとう

理事長 菅谷 定彦

狭山キャンパスに集う健康科学部看護学科は創立10年を待たずに看護師、保健師、助産師の国家試験で3分野そろって100%合格の偉業を達成した。野球の打撃部門では同一シーズン中に首位打者、ホームラン王、打点王に輝いた選手に与えられる「三冠王」の称号があるが、看護学科は「看護3部門三冠王」を、新型コロナ大流行などの困難を乗り越え見事に達成した。

初代看護学部長、2018年のリハビリテーション学科増設で健康科学学部長、さらに副学長も務めた今留忍先生、鈴木幹子健康科学学部長(前看護学部長)及び安達祐子、山口佳子 元、現看護学部長ら教職員の皆様、そして卒業生、現役学生それぞれの努力を高く評価しつつ喜びを分かち合いたい。

旧看護学部は旧子ども学部と共に2014年4月、狭山キャンパス開学でスタートした。私は現在理事長就任8年目だが、これに先立つ10年前から2年間監事を務めた。私と看護学科は「同期の桜」と私は考え、その状況を見守ってきただけに今回の三冠王達成はわがことのように嬉しく思い、東京家政大学の誇りである。

しかしトップの座を維持するのは簡単ではない。わが国の少子化は歯止めがきかず、4年制女子大は過去25年間に年1校余が姿を消し98校から70校に減った。看護学科にかかわる教職員、学生そして理事長の私もここで一段と気を引き締め、間断なき前進をし続けねばならない。



ご挨拶

学長 井上 俊哉

看護学科を支えてこられた教職員、学生の皆さんはじめ、看護学科に関わってこられたすべての皆様、看護学科の開設10周年、まことにおめでとうございます。

平成26(2014)年の看護学部看護学科(平成30年から健康科学部看護学科)の開設は、昭和61(1986)年の文学部設置以来、本学にとって28年ぶりの新学部新学科の設置でした。まったく新しい領域の学科であり、他大学、他機関の多くの方に協力していただくことで、立ち上げが可能になりました。当時協力してくださった方々にあらためて深く感謝いたします。私自身、看護学科が設置された狭山校舎で勤務していた

こともあって、看護学科を応援する気持ちは人一倍でした。一期生から学生たちの頑張り、先生方の並大抵ではない努力のおかげで、100名の卒業生が国家試験にほぼ毎年100%の合格を勝ち取るなど素晴らしい実績を上げ、看護学科はこの10年で東京家政大学を代表する学科の一つになりました。

私はこれまで3度の入院経験があります。入院中は医師の世話になったのはもちろんですが、まさきに頭に浮かぶのは看護師の方々です。看護師は患者の心に寄り添い、そのニーズに応えることができる唯一無二の存在です。医療の技術や知識はもちろんのこと、患者を理解し共感する力を身に付けた本学看護学科の卒業生たちが患者さんやその家族に深い影響を与えていることを誇りに思います。

看護学科の10周年を迎えるにあたり、学科の成長に貢献してこられたすべての方々に心からの感謝を申し上げます。皆様の努力と献身があったからこそ、このような素晴らしい節目を迎えることができました。看護学科の更なる発展と成功を祈念し、心よりお祝い申し上げます。



ご挨拶

健康科学部長 鈴木 幹子

東京家政大学における医療専門職の人材育成が狭山キャンパスから開始されて10年が経過しました。2014年に看護学科が、2018年にはリハビリテーション学科が開設され、健康科学部は2学科体制となっています。2012年、恩師である森美智子先生から看護学科開設のお話をうかがい、驚きと同時にワクワクした記憶があります。長い歴史のある文系の女子大学に看護学科が開設されるのは、画期的な出来事で、新たな挑戦の一員に加えていただけることが光栄で胸がいっぱいになりました。開設前、池袋の中華レストランで、当時の学長だった木元先生と岩井理事、森先生、前学部長の今留先生方と、新たな看護学科への熱い思いを語りあったことが思い出されます。開設前からこれまで、多くの方にお力添えをいただきました。特に実習施設の開拓には岩井理事をはじめ準備委員の皆様にとにかくご尽力を賜り、誠にありがとうございました。また、学生の教育にご支援を賜った教職員や後援会の皆様、実習指導に関わってくださった実習施設の皆様に深く感謝申し上げます。本学科の卒業生は、現場で高評価をいただいております。OG会での先輩のお話からもその目覚ましい成長ぶりが伝わってきて感慨無量です。この10年の間にはいろいろなことがありました。2020年に発生した新型コロナウイルスの感染拡大の危機には教員も学生も一丸となって乗り越えることができました。今後も本学科が大切にしている「その人らしい生活を支える看護」を追求し、次世代の看護を担う人材育成に取り組んでまいります。



ご挨拶

看護学科長 山口 佳子

実習施設や地元自治体など関係者の皆様、在校生や卒業生ならびにご家族の皆様、本学教職員の皆様にご支援ご協力を賜り、本学看護学科は10周年を迎えることができました。心より感謝申し上げます。

私は、同じ大学に勤務されていて親交のあった今留初代学部長からのお声掛けで、保健師課程の実習先確保や公衆衛生看護学領域担当科目のシラバス作成等に関わらせていただくようになり、2014年度の看護学科開設時に本学に着任いたしました。新設学科ならではの困難は多々ありましたが、皆で力を合わせて一から学科をつくりあげていく充実感や達成感が勝りました。

2022年度からは学科長を務めさせていただいておりますが、少子高齢化の進展や家族形態の変化、グローバル化、価値観やライフスタイルの多様化、災害の頻発、新型コロナウイルス感染症のまん延などにより、看護ニーズは高まる一方です。本学看護学科は、社会の変化に応じた看護教育を追究するため、2018年度と2022年度にカリキュラムを改正し、2018年度にはリハビリテーション学科開設に伴い看護学部看護学科から健康科学部看護学科へと改組しました。時代に合わせてしなやかに変化を遂げつつ、その根底にある教育理念は変わりません。これまで、これからも、建学の精神「自主自律」に基づき、あらゆる年代の個人・家族・集団・組織・地域社会を対象として健康の保持・増進・回復を図り、「その人らしく生活する」を支援できる看護専門職を育成してまいります。



これからも人に寄り添い支援できる人材養成を!!

常務理事 岩井 絹江

看護学科開設10周年おめでとうございます。

看護学科の先生方の日頃の心を込めた教育と、たゆまぬご努力で学生がしっかり育っています。さらに、看護師課程、助産師課程、保健師課程の国家試験の高合格率を維持するための、あたたかく、厳しく丁寧な教育とご指導に心より感謝と御礼を申し上げます。

<看護学科誕生の経緯>

入試担当事務責任者になった30年前から東京家政大学に看護・医療分野が欲しいと思い続け、当時の清水司理事長・木元幸一学長の思いと繋がったのは15年前。

清水前理事長からは「まず介護福祉分野を」との希望。木元学長からは「薬学部の検討も」との提案もあり学内で、可能性も含め2010年には内々で検討を開始しました。

既に看護学部を認可申請・開学し、看護分野の大学院を埼玉県内の病院の中に開設された、目白大学の当時の佐藤弘毅理事長を木元学長とともに訪問し、認可申請までの詳細な指導を受けることが出来ました。経験に基づく貴重なお話は医療分野のない本学にとってはとても大きな力となり、その後も折あるごとにご指導いただきました。

こんな中で13年前、日本私立大学協会の会議で、当時の日本赤十字秋田看護大学学長森美智子先生との奇跡的な出会いがありました。森先生の『看護師養成への熱意や明るくて積極的な生き方、思いのこもったお話』に吸い込まれながら、『人を支える教育を続けてきた東京家政大学として看護師養成領域がほしい』という本学の積年の思いを伝え続けたことが、今改めて走馬灯のように思い出されます。

森先生はご自宅もお近くのように駅前の稲荷山公園にお子さんたちと遊びに来られていて、駅前で広大な東京家政大学狭山キャンパスのこともご存じでした。森先生とたくさんお話をしている間に「私が入を探してあげる!!!」との声が出始め、看護学部開設準備室設置、学部長予定者選び、参加教員探しが開始し、看護学部誕生の礎となったのです。森美智子先生そして準備室を引き受けてくださった今留忍先生(初代看護学部長・健康科学部長、前副学長)・谷岸悦子先生・岩田みどり先生との出会いがなかったら東京家政大学に看護学部ができるのはもっと遅くなっていたと思います。

当時秋田にお住いの森先生が上京される度に、池袋西武デパートのレストランで食事をしながら人探しをしました。同窓会名簿から、この人を...と電話でお誘いくださったことは夢のようなことでした。助産分野教員として遠く離れた公立大でご活躍の現学部長の鈴木幹子先生との可能性が出てきたとわかった時は、「助産師課程が作れるかも!!!」と飛び上がった記憶があります。

日赤看護大学でなく国立大学ご出身ではありますが、人を通じての紹介で現看護学科長の山口佳子先生との出会いがありました。就任前の狭山キャンパス見学の折、地域と繋がる看護師・保健師養成への夢と期待を生き生きと語られていたことを、今も明瞭に覚えています。

森美智子先生は日赤看護大学・日赤看護短大の卒業生から多くの看護学科教員をご紹介くださいました。東京家政大学看護学部・看護学科の設立の偉大な功労者であり、何よりも熱意をもって教育することの必要性を伝えてくださいました。開設後から完成年度まで東京家政大学の教育顧問としてお力添えいただいたことも、後に引き継ぎたい大きなことです。

<認可申請での困難な日々を経て認可>

学内には看護学部開設に否定的な意見もあり、認可申請の日々の中で関係者の思いがまとまらないことが何より辛いことであったと改めて思い出されます。

コロナ禍・コロナ後はメール対応が主ですが、申請業務開始の13年前は、文部科学省大学設置室の担当官は予約すれば何回も会ってもらえ、設置を通すために必要なことへの厳しいアドバイスがありました。定期券がいるのではと思うくらい虎ノ門に通い、特に医療系学部は大学設置室と共に医学教育課の指導を仰ぐ必要がありとても困難な日々で、多くの方の理解・協力の必要性や新たな出会いの大きさを身にしみて感じた認可申請業務でした。

今留・谷岸・岩井で通い詰めた医学教育課の女性担当者が、けなげに(?)頑張る私たち女性軍に理解を持ってくださったのか、審査委員会当日まで適切なアドバイスを出してくださったことが何よりの力でした。

助産師課程申請においては正常分娩を10例、経験する必要がありますが、申請に協力を得られる病院がなく、戸田中央医科グループ故中村隆俊会長のご理解で、無事、認可申請が通過し、助産師資格を取れることになったことも、皆さんに理解していただきたいことです。

面接審査の日の案内板の思い出の写真がありました。当日は、木元学長・今留学部長予定者・岩井担当理事が出向き、大学設置分科会の厳しい面接を受けました。

特に看護系大学委員からは「大学の学部では看護師養成のみを、助産師・保健師は大学院で養成するように」と強い説得があり、「他の申請大学は受け入れていますよ」との指導でした。



「東京家政大学だからこそ、生まれる前の胎児から学び(助産師課程)、高齢になっても地域で生活する人への支援を学ぶこと(保健師課程)は必要である」と私たち3人は訴え、認可前審査面接は予定時間を大幅に上回りました。

看護学部誕生には多くの幸運の神様に恵まれたのです。面接室に入室して初めて分かったことでしたが、なんと偶然でしたが、東京家政大学を以前から理解してくださっている方お二人が大学設置分科会委員の中に加わっていました。「東京家政大学はここまで堅実に教育し、専門職業人を輩出し続けている大学であること」を他の委員に力説してくださったことも、認可されることに大きく幸いました。

幸運の神様に守られながら、認可申請という苦難の日々を乗り越え、平成26年4月3日、晴れて狭山キャンパスに1期生を迎えることができ、ご尽力くださった方々に感謝申し上げます。東京家政大学に新設された看護学科の計画的でエネルギーあふれる学生育ては目を見張るものばかりでした。先生方のご努力は10年を経た今も脈々と継続され、「人に寄り添い支援できる看護師・保健師・助産師」をしっかり社会に輩出できていることに感謝し、これからもよろしく願いいたします。



祝 辞

常務理事、認可申請時学長 木元 幸一

看護学科の開設10周年おめでとうございます。

看護学科の開設は、本学にとって悲願と言っても良いもので、今の時代において本学の建学の精神である女性の自主自律を叶える職業の代表と捉えていました。看護師は、女性が社会で十分活躍でき、また本学の生活信条である“愛情・勤勉・聡明”を持って多様な多くの人々の心身の健康に貢献できる職業であるからです。森美智子当時赤十字系大学学長に、本学の教育に共感していただき、設立へのご指導とご協力を頂きました。また、大学院での資格取得が増加している助産師や保健師の資格が学部でも奇跡的に与えられたのは、本学栄養士養成課程における長年の実績とその卒業生が活躍する戸田中央医科グループが有するベッド数の多い満足する実習産院が中村隆俊当時会長の協力により確保できたことです。単に看護師養成の学校で済まされることなく大きな利点を有して開設できた事は大きな喜びでした。今思い返しても、本学の伝統と教育に共感してご指導ご支援頂いた方々に出会い、長年蓄積してきた本学卒業生の実績に恵まれて設立できた看護学科でした。そして、入口だけでなくその卒業後の出口も念頭に置き、他大学に負けない可能な教育機会を取り入れた万全の人材育成機関としてスタートできました。

開設後10年間その設立主旨を維持し、さらに高めることにご尽力いただいた実習先の病院の皆様および今留初代学部長始め学内関係者の方々には心よりの祝福と御礼を申し上げます。看護学部を含む健康科学部は、我が国における大学教育においてまだ歴史が浅く、他大学同様、教員の確保と教育の質を維持することが要の学部です。今後、研究所や大学院を設置し、時代の要請に応え、教育研究の幅を広げると共にその高度化を図ることが次の10年の目標です。ここまで来た歩みを止めず、さらに前進発展されることを真に切望しております。



看護学部開設時の思い出

日本赤十字秋田看護大学名誉学長、元東京家政大学教育顧問

森 美智子

東京家政大学看護学科開設10周年記念、おめでとうございます。光陰矢の如く感じられます。

子どもが幼い頃、車で10分以内の稲荷山公園へ遊びに連れて行き、公園と一体化した東京家政大学(家政大)のキャンパスは外国の広い大学のキャンパスを連想させ、日本赤十字武蔵野短大にいたので、羨ましく感じておりました。

当時、日本私立看護系大学協会の常務担当理事をしていた森に、岩井理事が狭山キャンパスに看護学部を開設したいと協力要請があり、でなければ、大学以外の施設になる可能性があると同い、広義の意味で日本の大学の損失に当たると思い、即答した次第でした。しかし、それ以上に岩井理事の熱意とお人柄に感銘を受けたことが大きな要因でした。

準備室では、その任に当たっている谷岸先生を家政大の理事である岩井理事が支援され、昼夜を問わず作業されていました。時に、谷岸先生、岩井理事、今留先生に森が加わり、夜遅くまで作業したことが思い出されます。その頃は、看護学科開設が続き、文科省の対応も厳しく、審査の際、岩井理事はもとより木元学長も大変ご苦労されておられました。

今日、狭山キャンパスが存続できているのは、ひとえに岩井理事の並々ならぬご尽力の賜物と思います。そして、多くの関係者皆様の御努力の結果が、看護学部から健康科学部へと進展したと考えられます。家政大学の建学の精神を大切にされ、さらなる充実発展を祈念しております。



看護学科 10 周年に寄せて

常務理事、初代子ども学部長 岩田 力

2014年4月、狭山キャンパスに看護学部看護学科と子ども学部子ども支援学科が新たに開設されました。新1年生を迎え、改めて嬉しく、それまでの新学部開設に伴う苦労も忘れる瞬間でしたが、さらにこの集ってくれた学生を立派な職業人として送り出す責任を感じました。看護学科を造られた森先生、今留先生、そして学科の先生方もおそらく同じように思われたことでしょう。

その後リハビリテーション学科の新設に伴い看護学部は健康科学部へと発展し2学科体制となりましたが、少子高齢化という抗い難い流れの中、ますます看護の領域はその重要性を増しています。高齢化のみに眼が行きがちなフレーズですが、少子であるがゆえに、この世に生を受けた子どもたちがどのように健康な大人になっていくのかを支える分野としてもまた看護の領域は、子ども支援学科が担う保育者養成という役割とともに大変重い役割を担っています。

大学ホームページに示されますように、“生きる”をサポートするスペシャリストを養成する看護学科がますますその本領を発揮され、東京家政大学発の新しい看護学をも築いていかれますよう、祈念いたします。また狭山キャンパスは現在健康科学部と、名称を変えた子ども支援学部の2学部3学科の体制ですが、今後の新たな10年を目指し、お互いの特色を生かし且つ学問的な連携を実現できるものとして、発展されますよう願うところです。



看護学科、その過去・現在そして輝かしい未来へ！

名誉教授、東京家政大学附属女子中学校・高等学校統括責任者 兼
高等学校長、初代子ども支援学科長 大澤 力

『看護学科開設10周年』心よりおめでとうございます！時を同じくして立ち上げました子ども支援学科元学科長として、たいへん感慨深いものがございます。当時の文部科学省や学内関連の諸手続き・作業内容を振り返ります時、本当に大変な思いと時間と労力を駆使しての開設でした。一学部設立すると一人死ぬと言われましたが、誰も死なず二学部【看護学部・子ども学部】同時に、良き仲間の方々と手を組み、足掛け2年間で立ち上げました。

さらに、現在の看護学科を探ると『“人間”をみる、“人間”を看護する』看護職としてふさわしい人間性を養い、その上で高度な知識と技術、行動力と実践力を兼ね備え、職業的自律性を持った人材を育成しますとあります。看護師国家試験合格率100%、保健師国家試験合格率100%、助産師国家試験合格率100%と素晴らしい内容が図示され、白衣に身を包んで明るく微笑む4名の学生が映し出されております。

そして、看護学科の未来は明るく輝いて見えます。21世紀から22世紀の世の中へ。次なる時代にも建学の精神：自主自律、生活信条：愛情・勤勉・聡明に裏打ちされた素晴らしい看護教育が継続致しますこと間違いございません。更なる発展をお祈り致しております。



看護学科創設10周年をお祝い申し上げます

副学長、狭山学務部長、子ども支援学部長 宮島 祐

2014年4月に狭山キャンパスにおいて看護学科と子ども支援学科が誕生し、共に本年10周年を迎えることができましたことをお祝い申し上げます。

本大学には併設病院がない中、多数の各種医療機関での実習には看護学科全教員の方々が実習期間中毎日付き添われ、ご指導に当たっておられることの大変さには、ただただ平伏するのみです。そのような状況下でも、

第1期生から助産師国家試験100%合格、さらには2022年度には看護師、保健師、助産師の国家試験全てにおいて100%合格を達成されるなど輝かしい業績を上げてこられ、加えて東日本大震災被災者の方々に対する心のケアに学生と共に継続的に参加されていたり、狭山市・入間市など自治体等の行事に参加され、積極的に社会貢献されておられるなど、大学内での日常的な教育以外にも実地体験の場を数多く設けられておられることは学生教育の見本を示されておられると感じております。

現在の日本における少子化と高齢化社会、さらには地球上の異常気象による様々な災害など、人々の健康を守るうえで、看護学科で学ばれ、医療の専門家の一員として社会に羽ばたいていく看護学生さんたちの役割は益々重要となっています。その様な若者を立派に育ててこられた看護学科の皆様のご尽力に感謝申し上げますとともに、今後もさらなる発展をされていかれることを期待いたしております。



祝 辞

リハビリテーション学科教授、初代リハビリテーション学科長
清水 順市

看護学科開設 10 年を迎え、大変おめでとうございます。

私は東京家政大学という大学があるということは高校生の頃から知っておりました。しかし、どのような学部で構成されているかは全く知りませんでした。8年前に東京家政大学で作業療法士・理学療法士を養成する学科を作りたいので協力いただきたいと声がかかり、その時に看護学部が存在していることを初めて知りました。そして、2017年4月から大学準備室にお世話になりました。ところが、6月になると看護学科で「疾病治療論Ⅱ」を担当されていた非常勤講師の先生が体調不良から講義継続ができないことになり、急遽、代理として途中から授業を引き継ぐことになりました。さらに後期科目として配置されていた「疾病治療論Ⅲ」も引き続き担当することになりました。授業内容は運動器疾患などリハビリテーション領域の対象となる疾患と重複していたことから、臨床で経験した事例を含めて授業を組み立てることができました。内容は、1年生にとっては少し難しい臨床のことを多く組み込んだのですが、期末試験では予想以上の点数を採ってくれて安心しました。

2018年4月からリハビリテーション学科開設に併せて、看護学部は健康科学部に改変され、2期生以降は健康科学部学生としてリハビリテーション学科の学生と歩むことになりました。私が担当した「リハビリテーション概論」は階段教室で授業を実施しましたが、学生は「リハビリテーション」に興味を示し、課題についてもきっちりと話し合いをしてくれたことを覚えています。このように看護学科の学生は学問まっしぐらに進んで歴史を創っていくものと期待しています。